

パリ・マラソンを走るひと

松田千枝さんの「歓びの走り」を追って

フランスだけでなく、世界中の国から走ることが大好きな人々が集まって、お祭りみたいに楽しく走るパリ・マラソン。
2005年4月10日、東京国際女子マラソン最多出場記録を誇る松田千枝さんは、この陽気な人々に交じって、そのパワフルなエネルギーの渦のなかで、静かな力強い走りを展開してくれた。

文 稲葉由紀子 撮影 稲葉宏爾



(右)凱旋門を背に、スタート直後のシャンゼリゼ。過去の記録によってスタート順が決められる。
(下)パリの大通りを大勢のランナーが駆け抜ける。



春の訪れとともに パリ・マラソン

毎年4月初めの日曜日、凱旋門前からスタートする恒例のパリ国際マラソンは、ちょうど明るい春の訪れと重なるせいだ。走る人も走らない人も、パリ全体が浮き浮きとお祭り気分になる行事である。登録すれば誰でも参加できる一般市民参加のマラソンで、テレビ実況中継もされるし、ニュースや新聞も取り上げるけれど、いつも記録・順位よりは、着ぐるみやピエロの扮装のランナー、沿道の応援団のほうが話題を集める。マロ

ニエの新芽がほころび、桜も桃もライラックも一度に花開く豪華なパリの春にふさわしい、賑やかなイベントなのだ。

参加者数は毎回3万5000人。シャンゼリゼを出発し、東のヴァンセンヌの森から西のブローニュの森まで、セーヌ河に沿ってパリを東西に往復する全長42・195キロのコースは、まさに観光地パリの名所巡りといつてもいい。そして、参加者のほぼ4分の1を外国人が占める。今年はそのなかに、日本の松田千枝さんの姿があった。資生堂に務める松田さんは、結婚して一児の母となった27歳のと

きから走り始め、日本女子マラソンの先駆者として数々の国内・国際大会を経験しながら、30年後の今も現役のランナーとして走り続けている。特に東京国際女子マラソンは第1回から現在まで23回出場、最多出場記録を毎年更新しているという。

そんな松田さんの姿を、私はパリに来る前から日本の女性雑誌の誌上で何度も目にしていた。ちょうど「女性の自立」が声高に語られていた時代、家庭も仕事も持ちながら、走ることによって自己表



ゼッケンと完走記念メダル。
トリコロールのリボンがフランスらしい。

25キロ地点のセーヌ河岸をさっそうと笑顔で走り抜ける松田千枝さん。ここからグングンとスピードアップしてゆく。画家・宇野かこさん直筆のウェアが明るく輝く。当日朝は4度の寒さだったが、だんだん青空が見えて、周りも明るくなっていった。

まつだ・ちえ
資生堂スポーツビューティーコンサルタント。
31歳で第1回東京国際女子マラソンに出場、現在も出場23回の記録を更新中。
著書に『走って輝く』(東京新聞出版局)、『ランニングの贈り物』(求龍堂)。

現し、記録を伸ばしてゆく松田さんは、女性誌の「スター」の一人だった。しかしその記録の頂点で彼女は踝を痛めてしまう。長期にわたった故障を乗り越え、むしろそれを機に、記録よりも調和と歓びのある走りを目指して、松田さんはランニング生活を再開する。

記録よりも調和 東洋の走りを目指して

マラソンに先立つ4月8日、パリの南端にある国際大学都市(シテ・ユニヴェルシテ)の日本館で、日本航空主催の「静中の動の美学」と題するイベントが行なわれた。

松田千枝さんと、20年にわたって彼女の走りを支え、身体改造に協力した中村多仁子さん、松田さんの体調調整とケアに貢献するスポーツアロマセラピストの目下部知世子さんが熱く語りあう。

中村さんは東京オリンピックの体操銅メダリストであり、現在、



一般のスタートの10分前に、「ハンディスポール(障害者マラソン)」がスタートする。拍手に包まれて、車椅子や目の不自由なランナーたちが、介助の人たちとともに走り始めた。

走る人々を横目に、せつせと働くパン屋さん。



大会終了後、ホテルの前で記念撮影。中村多仁子さん、ご主人の泉さんに囲まれる松田千枝さん。
タイムは、3時間6分24秒で全参加者約35000人中1943位、女性では33位の好成績だった。



る。会場の外側では、焼きソーセージや焼肉サンドの屋台がもうもうと煙を上げ、いい匂いを漂わせて客を集めている。

そんな喧噪のなか、3時間をほんの少し過ぎたとき、松田さんがゴールした。静かで無駄のないフォームはまったく崩れていない。しかも驚いたことに前半と比べ、後半のほうが圧倒的にスピードが上がついている。それまで軽口を叩いていたテレビのレポーターが、松田さんのゴールの瞬間「ブラヴオー！マダム！」と叫んだのは、セーヌ河岸の私と同じ印象を受け

華やいだ「気」をもらい 走りが満たされる

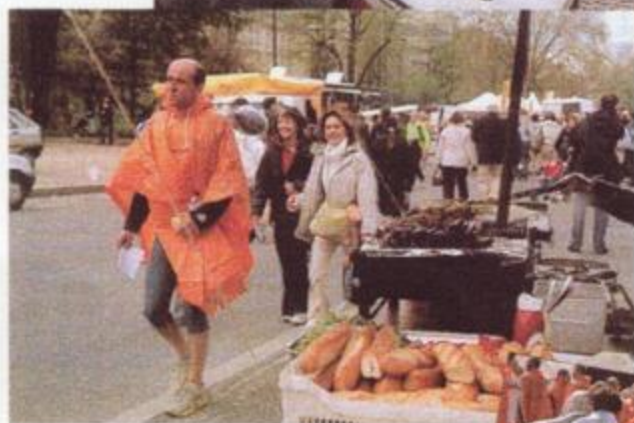
後で聞くと、今回、松田さんのコンディションは必ずしもベストではなかったという。けれど、「全体のエネルギーが大きい大会だったの、周りの『気』をたくさんもらいました」。

あの巨躯のフランス男たちも、デタラメな走り方も、彼女の走りを妨げはしなかったらしい。ラテン気質に満ちたお祭りっぽい大会の雰囲気と、パリの街の美しさを心から楽しんで走っていた松田さん。そしてまた、走る松田さんを様々に支え、見守った人たちが「彼女の走りはどんどん静かになっていきますね」と、中村多仁子さんは



嬉しそうだ。

そして何よりも「スタートをとにかく安全に乗り切ることが僕の役目でした」と語る、夫君の泉さんの眼差しが印象的だった。



(上2枚) バスチーユ広場の円柱が目の前にそびえる。広場では太鼓のグループが熱演、ランナーを励ます。
(左2枚) ゴール到着後の風景。
参加者にはオレンジのビニールポンチョ、水や果物、飴などが供され、凱旋門近辺はオレンジ色であふれる。会場の外では屋台がたくさん出て、お祭りのよう。家族と合流してお弁当を開く参加者もいた。

いなば・ゆきこ
エッセイスト。
いなば・こうじ
グラフィックデザイナー。
兩人とも1987年からフランスに在住。
著書に、『須賀敦子のフランス』
(河出書房新社)など。

東海大学体育学部教授。一方では東洋的身体の動きとスポーツの関係を一貫して追求している。このイヴェントでも自ら、藤田嗣治作の金色の屏風画の前で地唄舞を披露してくれた。自然、気、呼吸といった東洋的概念を重視する松田さんの走りは、中村さん、日下部さんとの長年のコラボレーションから生まれたものなのだった。

そして、一日置いた4月10日、パリ・マラソン当日は朝からあいにくの曇り空。朝の気温は4度。春を寿ぐ大会とはとても思えない肌寒さで、時折り雨もぱらついていて。スタート地点のシャンゼリゼ大通りに集まってくるランナー

たちも、大会支給のビニールのポンチョを着込んでいる人が多い。けれど彼らの表情の陽気なこと。のどかなこと。日本人と違ってフランス人はそもそも緊張というものをしない人種だが、それにしてもスタート直前だというのに、地下鉄の駅からまだ続々と参加者があふれてくる。この期に及んでバナナを食べている人もいる。腹痛にならないか、と人ごとながら心配だ。

8時35分、車椅子を中心とする「ハンデイスポート」のランナーたちがまずスタート。その10分後に、ゼッケン順に並んだ一般参加者がいつせいにスタートした。

雲霞のような3万5000人の人の波が、広いシャンゼリゼいっばいにあふれて動き出す。壮観だ。アスファルトを踏むヒタヒタという足音が集合し、ザーンという立ちのするような響きとなる。沿道から声援が上がる。

肘が触れあうほど込み合ったランナーの中から松田さんを見分け

るのはとても無理だ、と諦めかけていると、大木のような巨漢たちの隙間に、ピンク色のウェアがちらつと見えた。千枝さんは、夫君の泉さんに背後をしっかりとガードされて走ってきた。泉さんがサポートするのは5キロ地点まで。その後はそれぞれ自分の走りに徹する。寒さのせいか緊張のせいかわ、表情がやや固いかな、と思う間もなく、細い姿は人波に消えた。

メトロを使って、コースの先へとまわる。沿道の辻々には、ふだん地下鉄の車内や街頭で演奏しているミュージシャンたちが陣取って、音楽で選手たちを激励する。共和国衛兵軍楽隊も勇ましいマーチを奏でる。バスチーユ広場では、太鼓のグループが一条乱れぬパフォーマンスを繰り広げる。ああ、みんながお祭りを楽しんでいるのだ。サンルイ島を望むセーヌ河岸の25キロ地点で、松田さんを見た。雲のたれ込めた空がいつの間にか明るくなって、青空が顔をのぞかせている。一群となって現われた先頭集団は、ケニアとエチオピアの選手たちようだ。大会の参加者のうち8割以上が男性で、トッ

プに近いほど男性度が高くなる。しばらく後、松田さんもやはり男性に囲まれて姿を現わした。スタート時とは別人のように軽やかな印象。重心を低く、滑らかに柔らかに足を運んでいる。力づくで走っているように見える周りの男性と対照的だ。思わず「松田さん！」と声をかけると、弾けるような明るい声で「ありがとうございます！」と返事が返ってきた。雲が切れて、陽光が射す。セーヌの川面がきらきらと揺れ、白と薔薇色のウェアが光を帯びて輝く。このウェアは、やはり彼女を支援する画家の宇野かこさんが、手描きで創作したものだ。松田さんは走りながら微笑んでいる。

なんだかとても美しいものを見たという昂揚した気持ちのまま、しばらくその場に立ちつくして、走り過ぎる人々を眺めていた。

屋台村のようなゴール
ブラヴオー！マダム！

歓喜の走りが セーヌに映えた



パリ国際大学都市日本館で開催された「静中の動の美学」のイベントで、左から中村多仁子さん、松田千枝さん、日下部知世子さんのトーク。東洋的な身体の動きについて語り合った。それに先立ち、中村さんは地唄舞「鉄輪」を披露した。

